第九講　芸術論・音楽史・音楽社会学

次の文章を読んで、設問に答えなさい。なお、各段落の冒頭には、ア～キの番号を付してある。

ア　世界の他のどんな文化にも見られない西洋音楽の特質の一つに、それが「再生技術」（A）の開発に全力を傾注し、それをモーターとして一〇〇〇年以上にわたって発展してきたという点が挙げられる。このことはグレゴリオ聖歌以来の西洋音楽とキリスト教の密接な結びつきと、深く関わっていたのだろう。聖なる歌はいつでもどこでも同じように歌われねばならない。勝手な歌い方をして、土着の異教徒の歌と混ざり合ってはいけない。神の声は世界の津々浦々まで、「正しい形で」伝承されなければならないのである。生まれた瞬間に消えていく音楽というはかない芸術を、固定し複製可能なものにしようとしてきた点で、西洋の音楽は極めて特異な性格を持っていた。

イ　おそらく「再生技術開発史」としての西洋音楽の歴史は、三つの段階（B）に分けて考えることが出来よう。その第一段階が、中世からルネサンスにかけての、五線譜の開発の歴史である。これは音響の数値化の歴史であったとも言える。音高／音価をそれぞれ縦軸／横軸とする、音空間の設計図の開発史である。周知のように五線譜においては、まるで方眼紙のように、縦線と横線とが等間隔で整然と引かれている。そして西洋の音楽では専ら、その目盛上に正確に記すことが出来る楽音（いわゆるドレミファの音階上の音）のみが用いられ、それ以外のノイズは排除される。また二対一（♩：♪）といった具合に、数比として示すことが出来る音価の関係のみが使用され、いわく言いがたい（数比化しにくい）「こぶし」のような揺れは、楽譜からは原則として取り除かれる。音楽をいわば身体から引き剥（は）がし、客観化するわけである。リズムが身体にへばりついている（その人の身に備わったものである）限り、それはあくまで個人の「芸」という時間的／空間的制約を超えることは出来ない。西洋音楽がこれほどまでに世界中で広まりえたのは、マックス・ウェーバー（注1）が『音楽社会学』の中で「音楽の合理化のプロセス」として考察したところの、この客観化によるところが大きかった。

ウ　五線譜として合理化された部分は他人でも再生出来るが、それ以外の部分は生身の人間の身体から決して分離させることが出来ない。例えばショパンのノクターンやマズルカが彼自身によって一体どのように弾かれていたか。それこそがこれらの曲に

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

生命を吹き込んでいただろう、ショパンによる演奏の繊細きわまりないテンポの揺れが、どのようなものであったか。いくら楽譜を眺めていてもそれは分からない。五線譜に収まっている音は何とか再生が可能であるが、そこにはまりきらないニュアンスにこそ宿っていたショパンの<u>「芸」</u>(C)は、彼の死とともに永遠に失われてしまった。

エ　数値化不能の「生身の身体にへばりついている部分」まで含め、音楽をほとんどそのまま伝承する確実なやり方は、日本の伝統芸能のような厳格な徒弟制度を通して、身体コピーを作る方法だろう。楽譜に記せない部分（それは多くの場合、身体的要素であるわけだが）まで含めて、曲の弾き方を完全に身体で理解している人間を育てるのである。一八世紀くらいまでの作曲家には、「後世に作品を残す」という意識はあまりなかった。バッハにしてもモーツァルトにしても、その作品の多くはいわば「使い捨て」であって、だからこそ《マタイ受難曲》のような大傑作も初演から一〇〇年近く演奏されず、お蔵入りしたままだったわけである。楽譜は「後世にまで作品を再生可能なものとして残す」というよりは、どちらかというと高価な記念品のような性格を持っていた。

オ　しかしながら一九世紀に入って「永遠の名作」という概念が音楽においても広まり始め、作曲家の地位も向上して、彼らが「作者の意図」について強く主張するようになるとともに、「作品を後世にいかに正しい形で残すか」という問題が切実になってくる。そこで重要な役割を果たすようになるのが、一九世紀に入って生まれた近代の音楽院である。とりわけ重要なのが、メンデルスゾーンやシューマンによって創設された、ライプチヒ音楽院（一八四三年設立）である。(注2)フンボルトの教養教育の理念に強く影響を受けていたこの学校は美学や音楽理論や歴史を重視し、バッハ以来のドイツ音楽の理念を正しく受け継ぐことを使命としていた。それは過去の偉大な音楽を、その精神まで含めて正しく継承し、再現することが出来る身体を複製する機関だったとも言える。

カ　自分の意図を託する他者の身体を、作曲家自ら作り上げることもあった。例えば、晩年耳が聞こえずピアノも弾けなくなっていたベートーヴェンは、自作の演奏を他人に委(ゆだ)ねた最初の作曲家の一人である。彼の内弟子とも言うべきツェルニーは《皇帝》協奏曲を初演し、ベートーヴェンのピアノ・ソナタの正しい弾き方についての著作も残している。そして教育者としてリストらを育て、そのリストは当時誰も弾こうとしなかったベートーヴェンの《ハンマークラヴィーア・ソナタ》を公開演奏した。同じく自分ではピアノが弾けなくなったシューマンと、(注3)ヴィルトゥオーソとして名高かった妻クララの間にも、同様の関係を見出す

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

ことが出来よう。リストもワイマールで数多くの弟子を教え、後継者のハンス・フォン・ビューローには娘コジマを娶(めと)らせた。またワーグナーは自分の楽劇が要求している特殊な歌唱法をマスターした歌手を育てる学校の設立を構想していたし、マーラーやシェーンベルクも作品の意図を正しく理解している子飼いの演奏家の育成に全力をあげた。こうした一九世紀の作曲家における楽派(シューレ)への情熱が、西洋音楽における「再生技術史」の第二段階と考えられるだろう。

キ　D学校の制度化に続く再生技術開発の第三の段階は、言うまでもなく二〇世紀におけるレコードの隆盛である。音だけを身体から切り離して抽出再生することを可能にしたこのメディアの登場が、人々に当初どのような印象を与えたかを伝えるドキュメントの一つが、トーマス・マン(注4)の長篇小説『魔の山』にある。

（岡田暁生(あけお)『音楽の聴き方』より）

注1　マックス・ウェーバー……ドイツの社会学者・経済学者（一八六四年～一九二〇年）。
注2　フンボルト……ドイツの言語学者・政治家（一七六七年～一八三五年）。
注3　ヴィルトゥオーソ……超一流の演奏家のこと。
注4　トーマス・マン……ドイツの小説家（一八七五年～一九五五年）。

問１　傍線部Ａ「『再生技術』」の説明としてもっとも適当なものを、次から一つ選べ。
①　音楽を身体から引き剥がして客観化する合理化のプロセス。
②　神の声を正しい形で世界の津々浦々にまで伝承させる聖なる歌。
③　作品が要求する特殊な歌唱法をマスターした歌手を育てる学校の設立。
④　生まれた瞬間に消えていく音楽を複製可能なものとして固定させる試み。
⑤　身体から切り離された音だけを抽出することが可能な再生メディアの登場。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問２　本文で、筆者は、傍線部Ｂ「三つの段階」について、順次、論じていく。それぞれの内容と段落番号イ〜カでの記述との関係を述べた以下の項目のうち、もっとも適当なものを一つ選べ。

① 段落イ・ウは「第一段階」を説明し、エ〜カでは「第二段階」を説明している。
② 段落イ〜エは「第一段階」を説明し、オ・カでは「第二段階」を説明している。
③ 段落イで「第一段階」を説明し、ウ・エでその問題点を指摘し、オ・カで「第二段階」が説明される。
④ 段落イ・ウで「第一段階」を説明し、エ・オでその問題点を指摘し、カで「第二段階」が説明される。
⑤ 段落イは「第一段階」の説明だが、ウ以降は「第一段階」と「第二段階」の説明が交互に提示される。

問３　傍線部Ｃ「『芸』」とはどういうものか、本文中の語句を用いて、二十五字以内で説明しなさい（句読点等を含む）。

問４　傍線部Ｄ「学校の制度化」とあるが、それが目指したことを端的に述べた四十五字以内の部分を本文中から見つけ、最初と最後の五字をそれぞれ抜き出して示しなさい（句読点等を含む）。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第九講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　岡田暁生＝おかだ　あけお（一九六〇〜）京都府生まれ、大阪大学文学部卒、同大学院へ進み、文学博士。現在、京都大学人文科学研究所准教授。本書『音楽の聴き方』は吉田秀和賞受賞、入試でも頻出です。他に『西洋音楽史―「クラシック」の黄昏』『オペラの運命』（サントリー学芸賞）などの著作があります

語句

土着＝どちゃく→その土地に根付いている・先祖代々続く
津々浦々＝つつうらうら→いたるところ・あまねく広く・全国すみずみまで
特異＝とくい→特別・異質
専ら＝もっぱら→ただそれだけ・専門に
客観化＝きゃっかんか→自分自身と距離をおいて冷静に見ること・対象化・物体化
制約＝せいやく→制限・縛り・限定
合理化＝ごうりか→曖昧さをなくし数値化したり、秩序や法則性を見いだすこと・効率化・能率化
お蔵入り＝おくらいり→完成した作品が公開されないこと・日の目を見ない
子飼い＝こがい→未熟なうちから大切に育て上げて、一人前にすること

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第九講

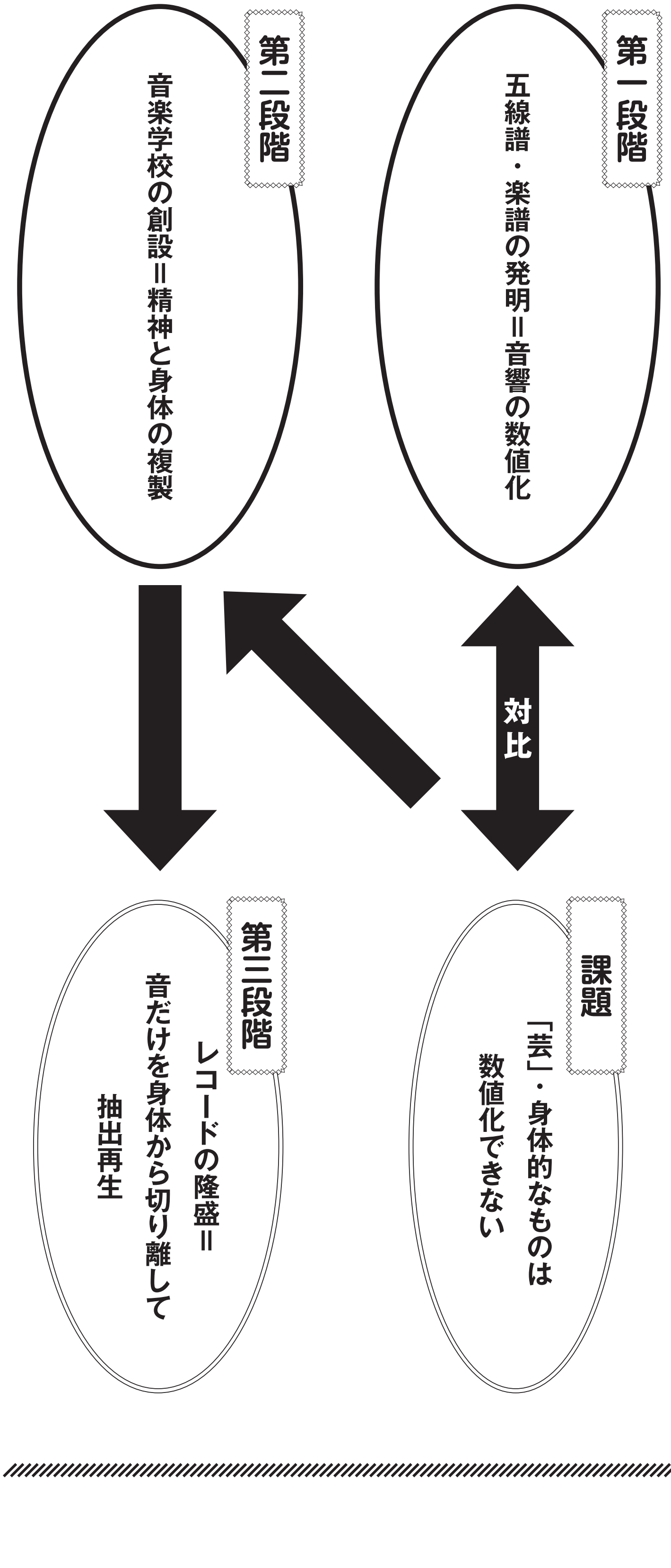
次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）作品の完成に全力をケイ注する　①形　②経　③掲　④契　⑤傾
（イ）展示用に作品のフク製を作成する　①副　②復　③複　④福　⑤腹
（ウ）ヨーロッパ音楽の特イ性を挙げる　①偉　②異　③意　④威　⑤居
（エ）メロディを五線フに書き留める　①譜　②布　③符　④普　⑤訃
（オ）等間カクに距離をたもつ　①各　②隔　③画　④格　⑤拡
（カ）公開の演ソウ会を催す　①相　②送　③壮　④奏　⑤想
（キ）徒テイ制度で後継者を育てる　①挺　②体　③邸　④弟　⑤亭
（ク）大作家のケッ作を上演する　①潔　②結　③決　④血　⑤傑
（ケ）新たに音楽院をソウ設する　①創　②想　③草　④総　⑤荘
（コ）独特の歌ショウ法を訓練する　①昌　②唱　③省　④章　⑤証

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第九講　芸術論・音楽史・音楽社会学

《本文の対比構造》



© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

《解説》

問１《傍線部説明・選択肢》

本文に三段階で説明されるすべてが「再生技術」です。つまり「五線譜」「学校」「レコード」です。①の「音楽を身体から引き剥がして客観化する合理化」は第一段階の「五線譜」部分の説明です。三つのうちの一つにすぎません。したがって、部分的指摘の誤りとなりますよ。同様に③の「学校の設立」は第二段階の部分にすぎませんから、部分的指摘の誤りです。⑤の「身体から切り離された音だけを抽出することが可能な再生メディア」は「レコード」、つまり第三段階の部分だけ。今回は、この部分的指摘の誤りに気付く練習ですよ。こうして何度も出てくるという事実から、みなさんの納得がいただけると思いますが、わざと〝部分的指摘〟をして間違いの選択肢をつくっているわけです。そういう典型的間違いの仕組みがあるのだ、と理解すると今後、ハイスピードで解答できるようになるという想像がつくでしょ。今回の文章は、イ段落から、順次、第一・第二・第三の「再生技術」が紹介されていくわけですが、それらを総まとめしているのが、序論にあたるアです。その中で「西洋音楽の特質」として「生まれた瞬間に消えていく音楽というはかない芸術を、固定し複製可能なものにしようとしてきた」と説明しています。ゆえに、④が正解です。②はどうなのか。これもアに出てきますが、「グレゴリオ聖歌」などの「聖なる歌」は具体例です。いいですか、選択肢選びでは、〝具体例は、一段、落ちる〟のです。選びたくないのです。「もっとも適当なもの」を選ぶ問題において、〝正解ではない選択肢〟として用意されているのだ、ということを知ってください。

問２《段落内容説明・選択肢》

第一段階の「五線譜」は、音の数値化という役割でした。ところが、「数値化不能の『生身の身体にへばりついている部分』」「芸」の部分は残ってしまいます。その話が出てくるのがウ・エで、その解決案として「学校」が登場するのが第二段階。これがオからです。したがって、③が正解です。第二段階（「学校」）はオからなのに「エ〜カでは『第二段階』」とした①は×。④は問題点の指摘を「エ・オ」としている点で×。②は、その問題点の指摘をせず、大雑把に「イ〜エ」を「第一段階」としているため、不充分です。⑤は「ウ以降は『第一段階』と『第二段階』の説明が交互に提示」が×です。オ〜カは「学校」つまり後継者育成の話です。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問３《傍線部説明・記述》

「芸」とは、問2の説明でもふれたように「五線譜」の問題点です。「楽譜」による「数値化不能」で「生身の身体にへばりついている部分」のことです。[イ]～[エ]に書かれています。記述答案をつくるときの心がけは、〝具体例はカット〟〝対比を表現〟〝繰り返し登場する語・言い換えられている語がキーワード〟です。したがって、「ショパン」といった具体例にはふれません。対比は〝五線譜・楽譜⟷身体〟です。繰り返されたり、言い換えられたりしている語は「数値化」「数比化」「客観化」「合理化」です。これらが得点になる箇所です。どれでもＯＫ。次に第二ポイントは「数値化」「客観化」「合理化」「数比化」です。第一ポイント「五線譜」「楽譜」「ドレミファの音階」です。第三ポイントは、それが「できない」「不可能」です。第四ポイントは「身体」「生身の身体」です。第五ポイントは、その身体と「分離できない」「へばりついた」です。五つポイントを用意しましたが、三つできれば上出来ですよ。以下、自分の答案をチェックして、該当箇所があれば、一つずつ加点してください。順番は問いません。なお、「句読点を含む」と設問条件にありますから、文末に「。」をお忘れなく。ないと減点です。

問４《傍線部説明・抜き出し》

「学校」は音楽の複製技術の第二段階です。言い換えれば、問3で書いた「楽譜」の限界、身体にまつわる問題点を解決するためのものです。[オ]に「学校（音楽院）」の登場とその「使命」が語られています。この「使命」は設問文の「目指したこと」と重なります。では、その中身とはなにか。「過去の偉大な音楽を、その精神まで含めて正しく継承し、再現することが出来る身体を複製する機関」です。最初と最後の五字ですので「過去の偉大～製する機関」が完全解答です。ちなみに「過去の偉大～を複製する」でもＯＫとします。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

模範解答

問１＝④　　問２＝③

問３＝楽譜による数値化不可能で身体と分離できない部分。

問４＝過去の偉大～製する機関（過去の偉大～を複製する）

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　解答　第九講

（ア）⑤　（イ）③　（ウ）②　（エ）①　（オ）②
（カ）④　（キ）④　（ク）⑤　（ケ）①　（コ）②

解答漢字一覧

（ア）傾注　（イ）複製　（ウ）特異性　（エ）五線譜　（オ）等間隔
（カ）演奏会　（キ）徒弟　（ク）傑作　（ケ）創設　（コ）歌唱法

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。